

特集

# この本と私



## 「高丘親王航海記」

澁澤 龍彦著

ずいぶん昔に、実在の人物の史実だろうと思ひ購入したのだが、初めに想像していた内容と大違いで、夢物語のような内容をついつい読み返してしまふ。主人公は平城天皇の第三皇子高丘親王。政変の煽り<sup>あお</sup>で廢太子となり、出家。後に唐の国に渡り天竺を目指すが羅越<sup>らえつ</sup>で消息を絶つ。天竺に向けての航海から消息を絶つまでを七つの物語で構成している。現実の話と思つて読んでいたので、「そんなことはありえんやろ?」と思つたら、それはいつの間にか親王の夢の中の話として展開を始めていたりする。どこまでが現実でどこからが親王の見ている夢なのかはつきりしないが、一編ずつ収まってゆく不思議な感じが面白い。反面、どんどん目的地から遠ざかるのはもどかしい。親王が天竺を目指したのは幼い頃、藤原薬子によつてもたらされた天竺へのあこがれを現実にしよつとして旅に出ている。求道の為ではない。六十歳後半にして元気に夢を追い続ける行動力と、好奇心いっぱい<sup>うらやま</sup>の姿は素直に「すてきな大人やなあ」と思った。ただ残念なのは、志<sup>こころ</sup>半ばにして、病に倒れ、自分の足で天竺に渡ることを断念するところである。自分の死が近いことを知つた親王は、天竺と羅越を行き来する虎の餌となつて天竺に渡る方法をとる。親王は飄々と「牛車にでも乗つてゆるゆると物見遊山にゆくようじゃ」と言っている。が、私は親王に生きて天竺の地を踏んでほしかった。最近読むとその想いが強くなつていた。

扶紀子



文春文庫

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株)ファッションビジネス・御堂筋新聞